

国際協力のあり方を考える

名前：榎原 佳江

学校名：大阪府立渋谷高等学校

担当教科：1年地理A・3年現社

実践教科：現社クローズアップ(社会科)

時間数：6時間

対象学年：高校3年生

人数：180人

1. 教師海外研修を通して感じたこと

様々な視察の中で、いかに現地に合わせて、現地の支援につなぐのかという視点に気付かされた。JICAをはじめ、多くの日本の政府や支援団体の在り方に感心した。「技術移転」という言葉が印象的であった。ハヌマンドカ王宮やラブグリーンの視察で特に現地の声に寄り添う支援が見られた。また、訪問先の方が日本で勉強したという声も少なくなく、どういった国際協力が必要なのか考える大きなヒントになった。同じ地球に生きる市民としてつながっていきっていくという視点を大切にしたい。

一方で、女性やカーストの問題が所々で顕著に表れていたのが現状だと感じた。新憲法になり、差別はなくなったという説明も受けたが、「文化」が根深く残る中で、是正が必要な「文化」もあるのではないかなど疑問に思った。格差を「文化」という説明で片付けられることもあった。大きなポイントとなるのが教育だと感じたが、英語ばかりが大事にされたりして、人権教育のプライオリティの低さにショックを受けた。識字率や進学率がそのまま生活に直結していて、子どもや女性にとってあらゆる可能性が開花しないことが悲しい。

この研修で何よりも学びになったのは、毎晩の振り返りであった。同じ視察や体験をした仲間らと話していると、全く違う視点を知ったり、意見が食い違ったりすることもあった。教材作りや授業交流ワークショップでも、他校種の人々の考えが入ると、よりブラッシュアップされていった。メンバーそれぞれの学びをぶつけ合える関係性を日々高めていけたのが本当に大きな学びであった。ネパールで出会った人たちや今回の仲間たちから本当にエンパワメントされ続けた日々であった。また帰国後も、授業実践について相談し合ったり、授業の見学に行ったりと、参加者同士の学び合いが継続している。

2. 授業実践

【1】テーマ・目標

ネパールの暮らしや文化を学び、それを通して、途上国への国際協力のあり方を考える。ネパールと日本の文化の違いに出会い、体験を通して、異文化理解を推進する。様々なバイアスを経て、高校生の考えを交流させる。クンチャール村での暮らしを紹介しながら、そこにある豊かさについて考えさせる。自分の当たり前が誰にとっても当たり前ではないということに気付かせたい。幸せとは何か、国際協力とはどういうことかを考え、その上で、当事者性を持って、「自分にできること」を考えさせる。

- ・ネパールの暮らしを想像できたか
- ・カースト制による差別を理解できたか
- ・国際協力のあり方を自分なりに考えられたか
- ・自分にできる国際協力を実行したか
- ・よりよい国際社会について模索できたか

【 2 】 設定の理由

海外に興味がある生徒もいるが、途上国には無関心な生徒がほとんどである。素直で率直な意見を持つ一方で、「正しさ」の刷り込みで終わってしまい、自分で考えるのが面倒臭がる生徒も少なくない。卒業後、すぐ社会人になる生徒が比較的多いクラスが対象である。

3年の現社クローズアップは、「社会に出るための社会」をモットーに展開している。今回、ネパール現地での実体験をベースにしているため、写真や動画、実際の「もの」を用いることで、視覚的にもわかりやすい教材となる。ネパールの現状を知り、世界観を広げたい。私たちとは違う当たり前があることに気付き、地球市民の一員として、よりよい国際社会について考えさせたい。

また、単に「募金」で終わらない、国際協力のあり方を考え、小さなことからでも実行しようとする当事者性を意識させたい。「自分とは違う」、「日本とは関係ない」、どこか遠い国のことを通して、少しでも世界に関心を持つように変えていきたい。

【 3 】 展開計画

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	ネパールの文化 ～チャイを通して～ * ネパールという国のイメージを深め、食文化を通して、他文化に触れる	<ul style="list-style-type: none"> ■国旗の形や位置など、ネパールの基本情報を学ぶ ■チャイやネパールのお菓子を食べながら、ネパールの食を知り、食文化の多様性について考える ■「クマリ」を通して、文化や価値観の違いを意識する 	<ul style="list-style-type: none"> ・写真（スライド） ・ワークシート① ・ネパールの紅茶 チャイ ・ネパールのお菓子
2	ネパールの高校生 ～背景にあるヒンドゥー教～ * ネパールの高校生に出会い、彼らの考え方を知る	<ul style="list-style-type: none"> ■カースト制度について学習する ■ネパールで出会った高校生を紹介しながら、彼らの考えを想像する ■ネパールの高校生と自分たちの違いや同質性を考える 	<ul style="list-style-type: none"> ・写真（スライド） ・ワークシート②



「どんな時が幸せ？」
「将来の夢は？」
「あなたは今、幸せ？」
同じ質問を問いかけた

ネパールの高校生と
日本に住む高校生は
似ているか？違うのか？

必死で学ぼうとしているネパールの高校生に、胸を打たれた生徒は多くいた。

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
3	クンチャール村の暮らし *クンチャール村の生活を 知り、その工夫や豊かさ を考える	<ul style="list-style-type: none"> ■クンチャール村での暮らしを写真で見て、衣食住を中心にその暮らしを想像する ■その生活の中から、工夫されていることに気付く ■ネパールやクンチャール村にある豊かさについて想像する 	<ul style="list-style-type: none"> ・写真・動画（スライド） ・ワークシート③
4	国際協力とは何ぞや *村人になってみて、必要な国際協力を考える	<ul style="list-style-type: none"> ■日本のODAについて学ぶ ■村人になったつもりで、必要な支援を考えるワークを行い、村を想定したグループで合意形成を行う ■国際協力のあり方を各自で考え、文字にする 	<ul style="list-style-type: none"> ・写真（スライド） ・ワークシート④ ・開発教育教材



村人になって、その村に必要な支援について考える
「水道・電気・道路のどれを優先するべきか」



ネパールの衣装を試着する生徒
クルタ・トッピー

5	世界のために私自身ができること *国際協力のあり方と再考し、自分自身の関わり方を考える	<ul style="list-style-type: none"> ■みんなが書いた「国際協力とは」を共有し、共感するものや違和感を持つものをあぶりだす ■ネパールの衣装を着て見せて、もう一度ネパールの暮らしを思い出す ■ネパール現地で、教員集団で食い違った意見を紹介し、国際協力のあり方を再考する ■SDGsについて知り、自分自身ができる国際協力を考え、実行するきっかけにする 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の意見まとめ⑤ ・ワークシート⑥ ・ネパールの衣装 ・写真（スライド） ・SDGs資料⑥裏
6	国際協力・ふりかえり *よりよい国際社会について模索する	<ul style="list-style-type: none"> ■最下層カーストの女性についての新聞記事を読み、価値観や文化の違いを思い出す ■よりよい国際社会のあり方を想像する ■今までの取り組みを振り返り、学んだことや今後の課題を自分で考える 	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞記事⑦ ・ワークシート⑧

3. 成果と課題

最も成果が出た瞬間は、4限目のワークショップを終えるときであった。開発教育の教材を使って、グループワークをしたあと、「この問題の答えは？」と私が生徒に問うと、生徒は口をそろえて「ないー！！」と言った。つまり、その答えはそれぞれの立場に寄り添わないとわからないということだと生徒は理解した。それぞれの国や村の人の立場になって考えるということの重要性を感じた生徒が多くいた。すぐに「正しさ」を求めがちな生徒が、答えが一つでない社会の在り方を体験的に学んだと言える。

私は、「国際協力=募金」という生徒たちの刷り込みを感じていた。それも確かに一つだけど、もっともっと関心を持って世界を知ること、その国にとって必要なことを上から目線ではなく、一緒に考えることの必要性を理解してくれたのではないかと感じた。

最後の振り返りでは、自分自身にできる国際協力を、短期的・中期的・長期的に考えてもらった。文字にすることで、他人事ではほっておけない地球市民としての意識が少しはできた気がしている。「ネパール料理食べに行ったで」とお店を紹介してくれたり、「ネパール人に挨拶したら素っ気なかった」など報告してくれたりする生徒が少なからずいた。「大学生になったら、海外に行ってみたい！」「現地のスタディツアーに参加する」「途上国の現状を知りたい」などを書く生徒もいて、今後の人生で少しでも行動に移す生徒が現れることを、私は期待している。

Q3. 国際協力のために、あなた自身ができることを考えよう。

1 HOP 今週すぐする！	
2 STEP 1年間でする！	
3 JUMP 2030年までにする	

課題として、国際協力への考え方が食い違った意見が交わされるシーンをもっと工夫して、時間をかけて、生徒たちに揺さぶりをかけたかった。紙芝居を導入したり、ロールプレイをしたりするなど、想像力を掻き立てる工夫を入れたい。

また「途上国=かわいそう」「日本=恵まれている」とう意見から、どう抜け出すかという過程で、いかに押し付けにならないように、生徒が自分たちで気づき、学び取っていくようにするかが苦労した。「良いか悪いかではなく、違う文化や価値観を知ろう」と何度も何度も声掛けを繰り返した。

◆生徒の感想

「日本と少し違うからといって、その国が不便とかかわいそうという風に考えるのは良くないなと思いました。ある意味、日本のように物が充実していて便利なものばかりあると自分で考える力がなくなったり、知らなくていいようなことを知ってしまったり、案外、便利すぎるのもだめだと思いました。本当の幸せを実感できるのは自分で考えて、問題解決したときだなと思いました。」

◆生徒の感想

「日本が当たり前、日本の基準で考えるのは世界から見れば、失礼なんじゃないかと考えた。これは国と国以前に、人と人でも共通するという考えに変わった。その人がどんな性別で、どんなものが好きか、仮に自分の基準(予想)を超えたとしても受け止めることができる力がほしいと感じた。その人がどう考えて、そのような行動をとったか、そういったことも考えられるようにになりたい。まあ、とりあえず人の意見をきくことが大切かなと思いました。それを聞いた上で、自分の意見をしっかり述べられるようにになりたいです。」

◆生徒の感想

「世界には差別で苦しむ人や、経済がうまくいかず苦しむ人、生活ができなくて困っている人もいます。それぞれしてほしい協力内容は違うし、同じことで困っていても、違う見方をしている人もいますので、これが国際協力と言い切れることはできないのだとわかった。国際協力はとても必要で、世界中の人ができればとても素晴らしいことだが、一番大切なのは相手がどんなことで困っていて、何をしてほしいか、どんな協力を求めているかと知り、それに合わせた協力することだとわかった。」

Q 4. 国際協力の授業を受けて、あなた自身、どのように考えが変わりましたか。あなたが学んだことや考えたこと、またそう思った理由も含めて、書きましょう。

私は正直、ネパールのことを聞いた時、初めは日本と比べてしまって、かわいそうと思ってしまいました。でも、考えを変えて、比べるんじゃなくて、この国のことを理解しようとして話をきくと、その国ごとに良い所もたくさんあって、幸せと感ずること違って、とてもおもしろかった。この授業を受けて、理解がわかっていいと思います。

Q 4. 国際協力の授業を受けて、あなた自身、どのように考えが変わりましたか。あなたが学んだことや考えたこと、またそう思った理由も含めて、書きましょう。

国際協力をしたら、世界中が仲よくなって、差別も減るんじゃないかと思っただけど、戦争で相手に勝つために仲間にしたい国と協力するのは、世界平和には全くつながらない。国際協力で、良いことだけの言葉じゃないと感じた。もっと平和を目指した協力に、お金と時間を使うべきだと感じた。



ネパールにある「豊かさ」



□みんなから出た意見を読んでみよう。

- ・日本とは違い技術や設備面では不便だが、知恵は日本よりかは多いかもしれない。不便さがあることで、様々な工夫が増えることにより知恵は豊かだと思う。
- ・人がみんな優しい。SNSが発達していないから喧嘩とか病む人があまりいない。農業がたくさんできる。自然を大切にしている。発達しすぎていないから、自給自足して頑張っているように見える。日本は発達しすぎているから物や人に頼りすぎている。
- ・人と人が協力して、ひとつひとつのことを自らでおこなうこと。TV など娯楽がないので、人とのつながり、家族のきずなの強さかなと私は考えました。
- ・自然に囲まれた村があり、それぞれネパールの人に合った特色があると思った。日本人にはなじみのない文化でもネパールの人にとってはなじみのある文化があり、暮らす国、環境によって、価値観が変わるのだと感じた。そこにネパール独自の工夫がほどこされ豊かさがあると感じた。
- ・ネパール人は野菜を自分で育てて自分で消費しているから、自分が作って食べて美味しい時の喜びがあると思います。だからあんまりお金がなくても野菜はある程度育つから食べ物に対して豊かさがあると感じました。野菜を川で洗ったり、座って料理することはネパール人にとってはきつと面倒さもないと思います。
- ・自然が多く、何かに依存することがないこと。周りの人と触れ合ったり協力することが多そうなこと。人に任せることなく自分から行動するようになること。”あたりまえ”という考えを持たずに、一つ一つに感謝して生活できそうなこと。工夫して生きること。
- ・日本は自然と触れ合うのが少なくなっていて、電気や水、家、食べ物のありがたさが薄れてきている。それに比べて、ネパール人は電気が少なくても、家が土でも、食べ物を大切にしている、日本よりも不自由でも今楽しく、幸せに生きているのが、ネパールの豊かさと感じました。私も今幸せと聞かれたら、すぐにはいと答えられるようになりたいです。
- ・あたたかい心だと思います。家族と一緒にいる時間が多いイメージがあるから、日本より家族(人)のことを考えてそう。写真を見るたびに幸せそうでいいなと思う。

- ・ネパールにある豊かさは、人と人とのつながりであると考えます。豊かな生活を送れているわけではないが、その限られた環境の中で、家族や周りの人と協力し、生きている。なので、人と人とのつながりはとても強いと考えたからである。
- ・現地の人たちの人柄の良さ(明るさ)だと思います。たしかに、私たちの生活を見ると不便そうだと思うことが色々あるけど、それを大変だ、不便だ、とマイナスで考えることなく、前向きに物事を行っているところを見て、すごく自分も見習わないと改めて感じました。
- ・ネパール人はすごい純粋な人が多いのかなって思いました。みなさん心優しく笑顔がすてきな人が多い。勉強できることが幸せと言う子がいたり、将来の夢が国を守りたいだったり国をよくしたいと心の底から言えるものすごく心が暖かい人ばかりだと思いました。
- ・絆、愛情、夢、希望など、日本ではきれいごとだと片付けられてしまうことがネパールでは本当にあって恵まれていると思いました。水道などが無い分、家族や周りの人と協力して何かを乗り越える力が日本にはない豊かさだと思います。
- ・村に来た旅行者を歓迎する気持ち
- ・物などに苦勞する分、他人への思いやりがとてもあると感じた。なので、みんな大きな声で幸せと答えられたのかと思った。生活について私たちは便利な国に暮らしているから苦勞すると感じ、より求めてしまうのかと思った。だからネパール人は十分幸せなのかと思った。
- ・家族や他人を思いやる心だと思います。どれだけ日本の暮らしが便利でも、自分のことしか考えていない人がいたり、他人に冷たい。でも、ネパールの人たちはすごく広い心を持ち、他人の幸せに幸せを感じている。すごく豊かですてきだと思う。
- ・写真で見たらネパールの人たちみんな笑顔で幸せそうだった。日本の文化を教えたなら嬉しそうにしていたことが豊かさだと思った。
- ・先生のリコーダーをあげて喜んでいたお母さんみたいに色々な事に興味が沸いたり幸せを感じられること
- ・家族や親戚など、大勢でわいわい暮らすことができる。家族全員で家事や水汲みなどの作業を行うため家族の団結力や仲の良さが高まる。足を使う包丁など、ネパール独自の文化・伝統が現在も生かされている。
- ・珍しいもの(楽器など)に抵抗しない。

धन्यवाद ダンネバード